

コロナ臆断

市川 浩

八月小生の電腦作動を停止す。もはや親戚友人との聯絡も取れず、新電腦を購入す。嘗ては新品の電腦を得ば、以前に比べ機能充實の實感ありたるも、今回は日本語の多様性對應著しく手間どるを如何せむ。一方電視にて電網業界大手の社長より新しき業態擴大の發表あり。されど御持參の「スマホ」には米國大手の社章鮮やかに、我が國の電腦技術既に海外勢力に制壓せられたるを感じ、現内閣の最重點施策としてコロナと並ぶ「デジタル」も前途多難を痛感す。

そのコロナ問題なほ豫断を許さず、只管自宅待機の内、我には毎日の都道府縣別感染者數以外利用可能のデータは無きもこれを基に臆断以下の如し。

一、先づ今回の感染者増加の發端は七月上旬なれば、實際の感染は六月中旬と考へらる。この時期を振り返るに、空梅雨の猛暑日續くあり。

二、次に増加者の年齢別の割合を見るに、六十五歳以上激減の反面、中高年、若年層の急増が目立つ。これに對し高齢者の激減はワクチン接種の普及、若年層の急増は菌種のデルタ株への變異と説明せらるるも、後者は諸外國と必ずしも共通せず。

以上の事實を所謂感染現象の機構との關係にて考察するに、今年の猛暑は特に首都圏にては六月中旬より甚だしく、特に熱中症豫防のため、夜間の冷房頻りに奨励せらる。されど一般の冷房機は外氣の冷却をせず、單に室内空氣の冷却のみなれば、一方呼吸器系ウイルスは冬季に活性化すとせられをり、室内ウイルスの増殖を招くべし。同様のことは職場環境にもあり、密閉冷房の室内事務作業に従事の中高年者にコロナ感染の危機あらずや。

この事、電視にては夜間の冷房繼續は推奨あるも、換氣對策への言及なし。嘗ての日本家屋には隙間風なるありて、就寝中も換氣可能なりき。洋式密閉型構造多數を占むる今日、夜間換氣の奨励は不用心を招くらむ。かくて冷房は密閉状態にて使用が寧ろ一般的なり。

安全なる隙間風導入不可ならば、就寝直前及び起床直後の換氣に就き簡單なる實驗により、適正なる換氣の指導要領の作成並びに廣報これ有るべく、案外効果的のコロナ對策にあらずや。

本稿電送すべく操作中に月末を迎へ、この間に冷房の換氣強調の電視放映ありて、「コロナ臆断」の表題色褪せり。

(令和三年八月三十日受附)